

『安樂集』における自力・他力について

杉 山 裕 俊

はじめに

法然上人（以下、敬称を略す）は『選択集』第一章段において、曇鸞『往生論註』所説の難易二道をもとに自力・他力の区別を行い、さらに『浄土宗大意』では、

聖道門トイフハ、娑婆ノ得道ナリ、自力断惑出離生死ノ教ナルカ
ユヘニ、凡夫ノタメニ修シカタシ、行シカタシ。浄土門トイフハ、
極楽ノ得道ナリ、他力断惑往生浄土門ナルカユヘニ、凡夫ノタメ
ニハ、修シヤスク行シヤスシ。（『昭法全』四七二頁）

と述べている。以来、日本浄土教では「自力」聖道門「他力」浄土門」として広く認識されるようになり、自力は聖道門、他力は浄土門を表す言葉として多用されている。このような自力・他力に関して、法然が聖浄二門判の典拠とした道綽『安樂集』からの直接的な影響をみることはできない。しかしながら、『安樂集』にも自力・他力に関する用例は確認することができ、なおかつ、そこには曇鸞や後世の法然とは

異なつた概念を有する自力・他力が提示されているように思われる。そこで本稿では、『安樂集』における自力・他力について、以下の二点を中心に論じてみたい。

- ①曇鸞『往生論註』との比較を通じて、自力・他力に対する両者の捉え方がいかに異なっているかを明確にする。
- ②曇鸞の自力・他力に傾倒せず、道綽が独自の議論を展開した背景を考察する。

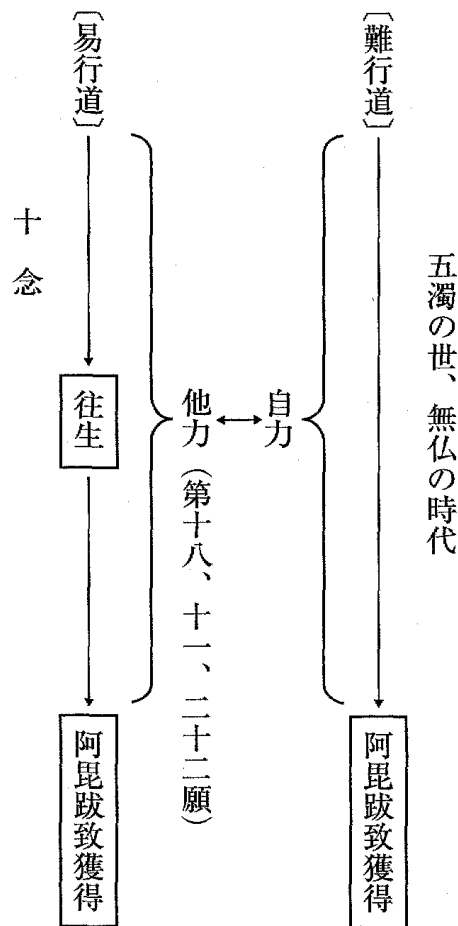
一 『往生論註』における自力・他力

曇鸞の自力・他力に関する用例は『往生論註』冒頭の難易二道と、巻下末尾の三願的証⁽³⁾において確認される。

まず冒頭の難易二道では、五濁の世、無仏の時代に阿毘跋致を求めることを難行道とし、阿弥陀仏を信ずる心を因縁として往生を願ひ、阿弥陀仏の本願力によって浄土に往生し、往生した後に阿毘跋致を得るといふ道程を易行道としている。ここでのいう仏願力、並びに阿毘跋致を得る際に働く阿弥

陀仏の本願力こそが『往生論註』における他力であり、他力は自力の対概念として提示されている。

次に卷下末尾の三願的証では、『無量寿経』所説の第十八、十一、二十二願の三願を挙げて他力の経証とし、これら三願にもとづく菩薩の往生の過程を明かしている。すなわち、曇鸞は阿弥陀仏の本願力により、十念の念仏によって浄土に往生し（第十八願）、往生した後に速やかに正定を得る（第十一願）という大乘菩薩道を易行道として提示するのである。なお、『往生論註』における難易二道と自力・他力との関係性を図示すると左記のようになる。



このように、曇鸞は阿毘跋致獲得の難易性を基準として難易二道を区別しており、娑婆世界で阿毘跋致の獲得を目指し、自らの力によって仏道修行を極めていくことを自力としている。

『安樂集』における自力・他力について（杉山）

る。一方、他力とは十念による浄土往生と、往生以後の速やかなる阿毘跋致の獲得を可能にする阿弥陀仏の本願力そのものであり、両者は互いに相対する関係にあると考えられる。

二 『安樂集』における自力・他力

道綽は『安樂集』第三大門において、『往生論註』所説の難易二道を引用し、易行道について次のように述べている。

言易行道者、謂以信佛因縁願生浄土、起心立德修諸行業^①、佛願力故即便往生。…中略…故名易行道也。（『正蔵』四七、二二頁中）

ここでは曇鸞と同様、信仏を因縁とした願生を顕示しつつも、『往生論註』にはみられなかった一文（傍線部^①）を追加することにより、易行道における発菩提心と実践行の必要性を強調している。また道綽は難易二道を提示した直後に、以下のような問答を設けている。

【問】曰、菩提是一。修因亦應不二。何故在此修因向佛果名爲難行、往生浄土期大菩提乃名易行道也。

【答】曰、諸大乘經所辨一切行法、皆有自力他力、自攝他攝^②。何者自力。譬如有怖畏生死、發心出家修定、發通遊四天下。名爲自力。

何者他力。如有劣夫以己身力擲驢不上。若從輪王即便乘空遊四天下。即輪王威力。故名他力。（『正蔵』四七、二二頁中下）

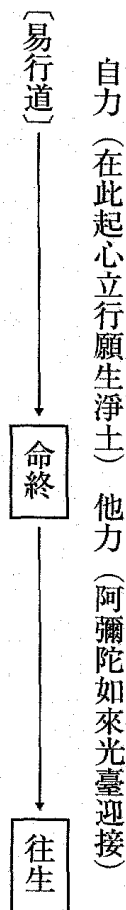
この問答では、曇鸞『略論安樂浄土義』の一文（傍線部^④）を引用し、大乘經典に説かれるすべての行法には自力と他

『安樂集』における自力・他力について（杉山）

力、自摂と他摂という二つの側面があることを明かしている。さらに『往生論註』三願的証の直後の文⁽⁵⁾を続けて引用し、曇鸞と同じく譬喩的表現を用いて自力・他力を説明している。従来の研究では、この一段をもつて直ちに「難行道」自力自摂の法門「易行道」他力他摂の法門」と解釈されてきた。ところが、『安樂集』の本文を確認すると、道綽は曇鸞の著作をもとに自力・他力を例示した後、

衆生亦爾。在此起心立行願生淨土^③。此是自力。臨命終時、阿彌陀如來、光臺迎接遂得往生即爲他力。〔正藏〕四七、一二頁下）

と付言している。道綽がここで追加した傍線部③は、先の傍線部①と同様の内容であることから、この一文は易行道における往生の過程を自力・他力によって説明した箇所であると推察される。そして、注目すべきは道綽が以下のように易行道全体を自力と他力に分けている点であろう。



このように、道綽は易行道を単に他力他摂の法門と規定しているわけではなく、そこには自力と他力の両面があることを明かしている。すなわち、『安樂集』における易行道とは、現生で菩提心を発し、往生淨土を願いながら行を修すこと（自力）と、臨終時に阿彌陀仏の来迎（他力）によって淨土へ往

生するという二つの過程を経て成立するものであり、道綽は自力・他力を対概念としてではなく、一つの連続した関係にあるものと捉えている。

三 『安樂集』における自力・他力の背景

前述のように、道綽は『略論安樂淨土義』と『往生論註』の文を合釈し、易行道にも自力が必要となることを明かしている。実際、『安樂集』の来迎に関する用例を確認すると、

若能信佛因緣願生淨土、所修行業並皆迴向、命欲終時、佛自來迎不于死王也。〔正藏〕四七、二二頁上）

とあり、願生者が阿彌陀仏の来迎を蒙るためには、信仏の因縁だけではなく、自らの力によって実践行を修することが求められている。道綽がこのような独自の議論を展開した背景として、ここでは以下の二点に着目したい。

(一) 易行道の主たる目的

『往生論註』における易行道の主たる目的は『無量寿經』所説の第十一、十八、二十二願という阿彌陀仏の本願力によって速やかに阿毘跋致を得ることにある。一方、道綽は『安樂集』第五大門において、修道の延促という視点から難易二道を再説しているが、ここでは「仏經」や「方便」にもとづく往生淨土を第一に説いている。つまり、道綽にとって易行道の主たる目的は阿毘跋致の獲得ではなく、釈尊の教えに従っ

て浄土へ往生することであると考えられる。⁽⁶⁾

(二) 易行道の行法

『往生論註』における易行道の行法とは、『無量寿経』の第十八願を典拠とした十念の念仏であり、阿弥陀仏の本願力によつて支えられた往生行である。一方、道綽は易行道を提示した第三大門末尾に、

縦使一形造惡、但能繫意專精常念念佛、一切諸障自然消除、定得往生。(『正蔵』四七、一三頁下)

と述べていることから、この「阿弥陀仏に心を傾け、ただひたすらに念仏する」ことが易行道の行法であるといえる。そして、ここでいう念仏とは、直後に『觀仏三昧海経』を経証として明かす「念仏三昧」⁽⁷⁾に他ならず、道綽は念仏三昧の実践によつてあらゆる罪障が自然に除かれ、必ず往生を得ることができると説くのである。事実、『安樂集』第四大門以降はこの念仏三昧を中心に議論が展開され、特に第四大門ではさまざまな大乘経論を博引傍証して念仏三昧の相状と利益を明かしている。したがって、道綽が易行道の行法として提示する念仏三昧とは、諸大乘経論を典拠とした往生行であり、それを支えているのは阿弥陀仏の本願力というよりは、むしろ釈尊が処々で説き勧めているという仏道修行としての正当性であると思われる。だからこそ、道綽にとつて念仏三昧とは、あくまでも自らの力で修すべき実践行であり、願生者は

自力によつて易行道を歩み続けるからこそ、阿弥陀仏の来迎によつて浄土へ往生することができるのであろう。

まとめ

上記のように、『安樂集』における自力・他力とは、先行する曇鸞や後世の法然が提示するような対概念として捉えるべきものではなく、易行道を含めたすべての行法に具足されるものであり、そこには諸大乘経典を肯定しようとする道綽の意図が見受けられる。

- 1 『昭法全』三二二―三二三頁。
- 2 『正蔵』四〇、八二六頁上・中。
- 3 『正蔵』四〇、八四四頁上。
- 4 『正蔵』四七、二頁中。
- 5 『正蔵』四〇、八四四頁上。
- 6 拙稿「道綽『安樂集』所説の難易二道について」(『浄土学』四六、二〇〇九年)を参照。
- 7 『正蔵』四七、一三頁下―一四頁上。

〈キーワード〉 道綽、自力、他力、念仏三昧

(大正大学大学院)

『安樂集』における自力・他力について(杉山)